

茅ヶ崎海岸が、「0」に帰る、100年に一度の再創造戦略の立案は、21世紀初頭に生きる我々同世代人に課せられた大きな使命であり、チャンスと考える。

こんな大きな舞台を与えられた我々は、まず、最高に「幸せ」と感じると同時に、グローバルで優れた多くの知恵を取り込むことに謙虚でなければならぬ、と提言したい。

自分たちの街や海岸は、自分たちで守る——という発想は、基本姿勢においては正鵠を得てはいる。

しかし、自然環境の保全と都会化への欲求がアンビバレントに存在する21世紀にあって、新しい「都市づくり＝海岸ルネッサンス」の発想は、極めて高度な、哲学とシステムが必要になるといわねばならない。

先般、提出した「価値観マップ」における、60年代の生産主体の価値観や、70年代のシンプル＆スローライフは、今、その質を大きく変えている。ましてその後の幻影と錯覚による乱開発の80年代は、多くの「負の遺産」を後代に残した。

そして、90年代は、人類史始まって以来のパラダイム・シフトがITの登場により、もたらされたのである。

この4つのディケイドの総括評価がなされないまま、我々はミレニアムを越え、21世紀に入ってしまったのである。

大きな文明史の流れから見ると、ここに人類が気づかない「落とし穴」があることを、碩学の有識者は指摘している。

ITの日常化の中で、地球は、限りなく小さくなったにもかかわらず、政治

やマクロ経済は逆に大きくゆるみ、個々のエゴイズムだけが跋扈している現状がある。

いわゆる「進歩と改革」のパラダイムの変容に、国家も、自治体も、学識者も答えを出せないまま、めまぐるしい「変化の嵐」の中を走り出したのである。ひとつの視座として、例証として許されるのなら、1960年代に着工された日本の基幹道路計画を思いおこすといい。

この大開発において、コンセプトづくりに参画した人たちは、どんな職業の、どんな知識を持った人たちだったろうか。

また、世界に名を馳せた、大都市ブラジリアの建設や、シルバーコロンビア計画など、最高頭脳とシミュレーションがなされても、大失敗に終わったケースもある。

その時代が、古く通り過ぎたという発想は許されない。人はその時代の中の「視野と思考」においてしか「未来」を見ることができないのである。

ましてやあらゆる史観が崩れ去ったと仮説された21世紀の現在にあって、「未来」という時間は、人間の前頭葉の範疇を越えてしまったように思える。

「落し穴」は、実はここにあるのである。未来時計が11時59分を越えた今、残りの地球存亡の秒数の中で、われわれは、地球に住まうである「未来の世代」に対して、あまりにも多くの義務と責任を背負わされている。それは「守る」とか「継ぐ」といういままでの概念で解決できるものなのだろうか——

Ecosophia とは、自然科学と人文科学が類推できる限りの「未来」に対して、<茅ヶ崎海岸エリア>という拠点を、どんな形で創造するかの大きな「歴史の父」からの問いかけであり、審問である。

細くっても長く生きるか、太く短く生きるか——のチョイスではなく、もっと崇高な創造観が、21世紀の「今」には必ず存在するはずである。

その答えを包含したコンセプトが Ecosophia なのである。(具体案は、次のステップです)